

平成 7 年度
埋蔵文化財緊急発掘調査概報

垂水遺跡
蔵人遺跡

1996年3月
吹田市教育委員会

序

平成 7 年（1995年）1月17日早朝に起きた阪神・淡路大震災は、多くの死傷者を出し、住宅や事務所、ライフライン等市民生活の基盤に、甚大な被害をもたらしました。

本市におきましても、広範囲にわたり様々な形での被害が発生しました。

被災されました市民の皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

さて、これら被災地の置かれた状況に鑑み、早急な復興が急務であるとの認識を基本とし、復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の保護の整合を図るものとして、文化庁より基本方針が示されました。

また、大阪府教育委員会ではこの基本方針に基づき、復旧・復興事業と関連する埋蔵文化財の具体的な取扱いを適用要領で定められました。

市教育委員会におきましては、文化庁及び大阪府教育委員会のご指導のもと、また、この基本方針や適用要領の趣旨を踏まえ、国庫補助事業として埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

平成 7 年度におきましては、垂水遺跡、藏人遺跡を対象として調査を行いました。

垂水遺跡では主に平安時代の造構・遺物が、また、藏人遺跡では弥生・古墳時代の造構・遺物が検出され、今後の周辺の調査に期待が寄せられます。

これらの成果を軸として、遺跡の重要性の周知、啓発を行い、点から面へと広がりを持つ埋蔵文化財保護行政を推進してまいりたいと考えておりますので、市民の皆様方におかれましては、ご理解とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

平成 8 年 3 月

吹田市教育委員会

教育長 能 智 勝

例　　言

1. 本書は、平成7年度国庫補助事業として実施した、垂水遺跡・藏人遺跡の緊急発掘調査をまとめたものである。

2. 発掘調査地点は次のとおりである。

第1次 垂水遺跡 吹田市垂水町1丁目787-5

第2次 藏人遺跡 吹田市江坂町1丁目960-1

第3次 藏人遺跡 吹田市江坂町1丁目960-1

第4次 垂水遺跡 吹田市円山町1727-7

3. 発掘資料の整理作業は吹田市岸部北4丁目10番1号、吹田市立博物館内資料整理室において実施した。

4. 本文は、調査担当者、田中充徳・西本安秀及び文化財担当増田真木が分担して執筆した。各章の執筆分担は、第1章 増田真木、第2章 田中充徳・西本安秀、第3章 田中充徳である。

5. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P.（東京湾標準潮位）を示す。

6. 発掘調査において、木下逸子・辻幸男・松岡敏子氏をはじめ、多くの方々の協力を得た。明記して謝意を表します。

発掘調査参加者名簿

調査主体 吹田市教育委員会

調査指導 大阪府教育委員会文化財保護課

調査担当 吹田市教育委員会吹田市立博物館 西本安秀・田中充徳

調査員 中森 祥、延原由実、湯浅直子

調査補助員 大本純子、大西文代、高井明美、小林久美子、平田昌子、長谷部裕子、大井久美、木下孝子、三村由紀子、脇阪 晚

目 次

第1章 平成7年度発掘調査の契機	1
第2章 垂水遺跡の発掘調査	5
第3章 蔗人遺跡の発掘調査	12

挿 図 目 次

第1図 調査地点（明治18年作成地図 ●調査地点）	1
第2図 垂水遺跡調査地周辺図(1:5000)	5
第3図 調査区配置図	5
第4図 土層断面図	6
第5図 造構平面図	7
第6図 出土遺物実測図(1)	8
第7図 出土遺物実測図(2)	8
第8図 出土丸木杭実測図	9
第9図 調査区配置図	10
第10図 土層断面図	11
第11図 蔗人遺跡調査地周辺図(1:5000)	12
第12図 調査区配置図	13
第13図 土層断面図	13
第14図 造構平面図	14
第15図 調査区配置図	14
第16図 T 1・T 2 土層断面図	15
第17図 T 3～T 5 土層断面図	16
第18図 T 1～T 3 造構平面図	17
第19図 T 4 足跡検出状況平面図	17
第20図 出土遺物実測図	18

図 版 目 次

- | | |
|-------|-------------|
| 図版 1 | 垂水遺跡（第 1 期） |
| 図版 2 | 垂水遺跡（第 1 期） |
| 図版 3 | 垂水遺跡（第 1 期） |
| 図版 4 | 垂水遺跡（第 2 期） |
| 図版 5 | 藏人遺跡（第 1 期） |
| 図版 6 | 藏人遺跡（第 2 期） |
| 図版 7 | 藏人遺跡（第 2 期） |
| 図版 8 | 藏人遺跡（第 2 期） |
| 図版 9 | 藏人遺跡（第 2 期） |
| 図版 10 | 藏人遺跡（第 2 期） |

報告書抄録

ふりがな	へいせい 7ねんどまいぞうぶんかざいきんきゅうはっくつちょうさがいほう
書名	平成 7年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報
副書名	垂水遺跡 藏人遺跡
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	増田真木 西本安秀 田中充徳
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL(06)384-1231
発行年月日	西暦 1996年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
垂水遺跡 第1期	吹田市垂水町 1-787-5	27205	86	34° 45' 49"	135° 30' 15"	19950712～ 19950727	35	建物の 建築
垂水遺跡 第2期	吹田市円山町 1727-7	27205	86	34° 45' 53"	135° 30' 30"	19951117	11	建物の 建築
藏人遺跡 第1期	吹田市江坂町 2-960-1	27205	85	34° 45' 33"	135° 29' 46"	19950626	12	建物の 建築
藏人遺跡 第2期	吹田市江坂町 2-960-1	27205	85	34° 45' 33"	135° 29' 46"	19950731～ 19950809	20	建物の 建築

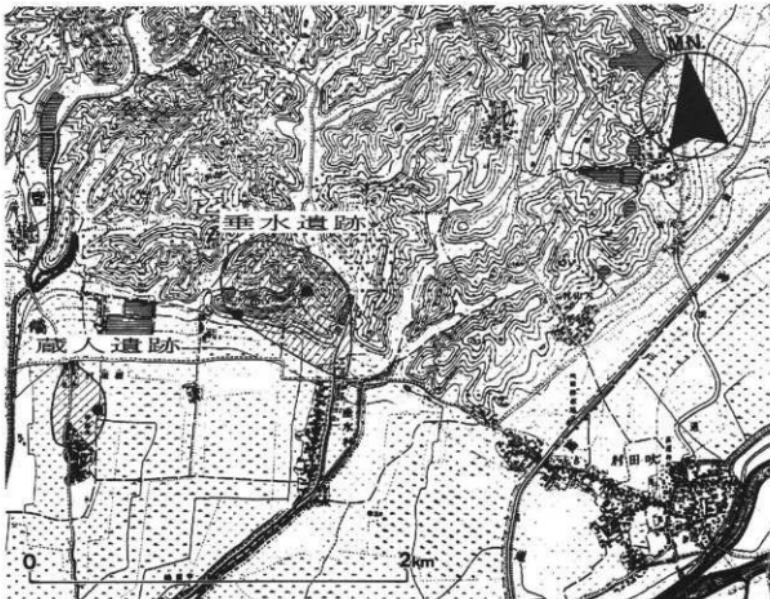
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
垂水遺跡 第1期	集落遺跡	平安時代	ピット4基、杭跡 4基、杭列、落ち 込み1か所	弥生土器、土師 器、須恵器、瓦、 黒色土器、鉄製品、 丸木杭など	
垂水遺跡 第2期	集落遺跡	弥生時代	なし	なし	なし
藏人遺跡 第1期	集落遺跡	弥生・古墳時代	ピット1基、杭跡 7基、土師器	なし	
藏人遺跡 第2期	集落遺跡	弥生・古墳時代	ピット96基、土坑 1基、畦畔2条	弥生土器、土師 器	なし

第1章 平成7年度発掘調査の契機

はじめに

阪神・淡路大震災において吹田市も市域全域が被害に見舞われたが、特に市域西半部で大きな被害を受けている。平成7年10月段階の概数であるが、全壊家屋10棟、半壊家屋300棟、一部損壊の家屋は10000棟に及んでいる。文化財については、国、府の指定文化財等には大きな被害は認められなかつたが、文化財関連施設では、市立博物館（岸部北4丁目）で建物外周に細かいクラックが入り、敷地の一部が沈下し、展示ケース内や収蔵庫内においても資料が落下や、転倒によって被害を受けている。また、南吹田5丁目の五反鳥遺跡展示室においても、展示土器に転倒したものがあったが、破損はしていなかった。しかし、展示ケース自体が大きく動いており、地震の大きさを見せつけている。

埋蔵文化財の包蔵地については、蔵人遺跡及び垂水遺跡範囲内で住居の被害が多く、計26ヶ



所で大きな被害が認められた（全壊4棟 約750m²、半壊22棟 約3600m²）。埋蔵文化財包蔵地内の復旧・復興に伴う対応については、震災直後から多様な議論が行われた。吹田市においてはその後の、文化庁の埋蔵文化財の取扱についての通知に基づいて、対応することとしたが、人員等の調査体制に大きな問題を含む状況であった。しかし、災害の傷跡は大きくのしかかり、倒壊家屋の解体、撤去に至るまでが時間を要し、復旧にいたってはさらに時間を要している状況であり、年内に復旧に伴う埋蔵文化財の対応が必要となったのは垂水遺跡において2件、蔵人遺跡においては2件であった。

垂水遺跡の調査

垂水遺跡は千里丘陵東南端の垂水町1丁目から円山町にかけて所在する遺跡である。昭和初期に当地一帯で行われた住宅地の開発によって発見され、昭和5年に島田貞彦氏によって「攝津国豊能郡垂水先史時代遺跡」（『史前学雑誌』2-5）に出土資料が紹介された。昭和30年すぎから、民間会社のグランド建設に伴い、垂水神社背後の丘陵地帯が大きく削平され、円山町の宅地開発以後はほぼ旧状を残していた遺跡の西半部が消失し、遺跡の大半は壊滅的な破壊を受けたものと考えられる。この工事中、膨大な量の弥生土器・石器を中心とする遺物が出土し、地元の研究者の収集活動が行われたのをはじめ、関西大学によって造成地の一部において調査が実施された。

その後、昭和48年から51年にかけて市史編纂事業に伴い、関西大学と吹田市によって垂水遺跡に対する初の本格的な発掘調査が実施された。調査では弥生時代後期の竪穴住居4棟、掘立柱建物、焼土坑、甕棺墓等を確認するとともに、後期を主に前期から後期にかけての多量の弥生土器が出土しており、集落として前期新段階から中期末の急激な増加を経て、後期畿内第V様式までその盛期が認められる。このように垂水遺跡は弥生時代集落を考える上で多くの問題を提供し、弥生時代の高地性集落として大阪湾岸に展開する遺跡群の中でも重要な位置を占める遺跡であることが明らかにされた。また、室町時代を中心とする中世墓、小祠、竈等を確認しており、本遺跡が中世にまで継続する複合遺跡であることが確認され、垂水遺跡の性格として、旧石器時代の石器散布地、弥生時代高地性集落、中世墓地等の性格が明らかとなった。

その後、現在まで、丘陵部分における開発に対しては何らかの調査を実施しているが、明確な遺構・遺物包含層等は確認されておらず、垂水神社境内地として残されてきた、丘陵南端部のみが旧状を残しているにすぎないといえる。

一方、昭和55年から56年にかけて、垂水神社東方の丘陵裾部分で発掘調査が行われ、溝・土坑・柱穴等を確認すると共に、弥生時代から室町時代にかけての全期間の遺物が出土した。丘陵上の垂水遺跡の弥生時代と中世の間を時期的に埋めると共に、宝塔紋瓦をはじめとする平安時代末期の遺物については、垂水神社との関連を想定できる所見を得られた。また、昭和62年には丘陵下の垂水町1丁目において調査が実施され、小規模な調査ではあったが、中世の条里地割に合致する小溝を確認すると共に、中世遺構面の下層の包含層から第IV様式を主とする多

量の弥生土器が出土した。弥生土器は垂水遺跡の集落盛期前半の様相を具体的に示す資料であり、出土した東海系の土器文化の影響を強く受けた集落単位が、丘陵上により発展する集落の母体として機能したことが推測された。その後も大半が小規模な調査ではあるが、丘陵裾から沖積平野にかけての部分では中期を中心とする弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が現地表下2m近くの深い地点で確認されており、特に弥生時代の遺物の状況が良好なことから当該期の遺構が丘陵下にも展開していることが確認され、現在遺跡の範囲は東西700m、南北700mの範囲に展開することが明らかとなっている。今回の調査は丘陵上の円山町1727-7及び丘陵下の垂水町1丁目787-5において事前の確認調査として実施したものである。垂水町1丁目の調査地点については当初は遺跡の範囲外であったが、試掘調査を実施したところ、遺構、遺物を確認したことから、遺跡範囲を拡大し、調査を実施したものである。

藏人遺跡の調査

藏人遺跡は市域の西端部、江坂町2丁目から豊津町にかけて展開する集落跡で、昭和36年、名神高速道路の建設工事に際して土器の出土が確認され、発見された遺跡である。出土した土器は古墳時代の土師器を主とし、少量の初期須恵器を含み、さらには奈良時代の遺物も認められた。この時点では工事に対して、具体的な対応がとられることはなかったが、昭和48年に刊行された吹田市文化財地図には藏人遺跡として明記された。その後、昭和52年から53年にかけて、公共下水道工事に伴う事前調査として、本遺跡に対する初の本格的な発掘調査が実施された。幅2m、延長150mにおよぶ調査によって、古墳時代前期の濃密な土器群を確認するとともに、その上層では奈良時代、さらには鎌倉時代～室町時代にかけての井戸群等を検出し、本遺跡が弥生時代から古墳時代、さらには奈良から中世に至る複合集落遺跡であることが明らかとなった。



調
査
風
景
(藏人遺跡)

古墳時代の出土遺物は古墳時代前半期の土師器が多く、庄内式期のものと布留式期の両者が認められるが、後者が圧倒的に多く、他には初期須恵器が認められる。6世紀の土器はごくわずかであり、この時期には遺跡は終息していたものと考えられる。古墳時代の遺跡として本格的に調査が行われたのは東方の垂水南遺跡に次いで2例目であり、両者の関連をみると、本遺跡は垂水南遺跡よりやや早く集落の盛期を迎えるものの、廃絶期は同様の経過をたどるようである。西方の豊中市域の利倉西遺跡、島田遺跡等の遺跡群とともに猪名川左岸の低地古墳時代集落の一つとして、大きな意味を持つ遺跡である。また、中世の井戸を中心とする鎌倉時代から室町時代にかけての遺構群や出土遺物から、農村集落の存在を想定できるが、室町時代の瓦が散見されるとともに、瓦を伴う石組溝を検出したことから、瓦葺建物の存在が想定された。文献史料からは当地一帯は春日社領垂水西牧に含まれる莊園関係集落であることが、平安～室町時代における検注帳との比較によって考証することができ、条里坪付から復元される土地利用状況及び遺構・遺物の考古学的所見によって中世藏人村の実態解明が可能であり、中世集落研究の上で大きな意味を持つ遺跡であることが明らかとなった。

この調査以後、昭和60年度には遺跡東端部近くで調査を実施し、鎌倉時代を中心とする、4時期の遺構面を確認し、耕作地から集落、そして耕作地という土地利用の変遷を確認したが、各遺構面とも大きな時期差は認められないにもかかわらず、50cm以上の地盤の上昇が見られる。これは遺跡の西を流れる高川の洪水等の激しい出水の影響を受けたものと考えられる。遺構としては掘立柱建物2棟を確認し、建物周辺から炭、鉱滓の出土から鍛冶に関連する作業場的な性格を持つ建物と判断された。また、それらの建物に先行する柱穴を確認し、その規模から、規模の大きな建物の存在が想定され、屋敷地の主屋の可能性も考えられ、短期間に屋敷地内の配置が変遷したものと考えられた。また、平成2年～4年度における調査によても、鎌倉時代から室町時代にかけての井戸及び、掘立柱建物等を確認し、中世集落についての新たな資料を得ている。集落の開始期については、遺跡北端部近くの試掘調査において縄釉陶器が出土しており、平安時代まで遡る可能性がある。室町時代以降については、明確な遺構等は確認されておらず、その時期の集落については本遺跡範囲の南に移動するようである。

今年度の藏人遺跡の調査は江坂町2丁目960-1において実施した。調査地点は昭和60年度及び平成2年度・3年度に調査が行われ、中世の遺構・遺物が集中して確認された地点の北側に接する地点である。

第2章 垂水遺跡の発掘調査

1. 吹田市垂水町1丁目787-5における発掘調査（第1期）



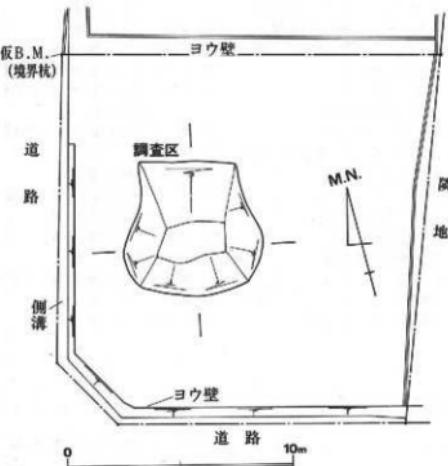
第2図 垂水遺跡調査地周辺図(1:5000)

(1) 調査の経過

今回の発掘調査は、個人住宅建替工事に伴う事前調査である。

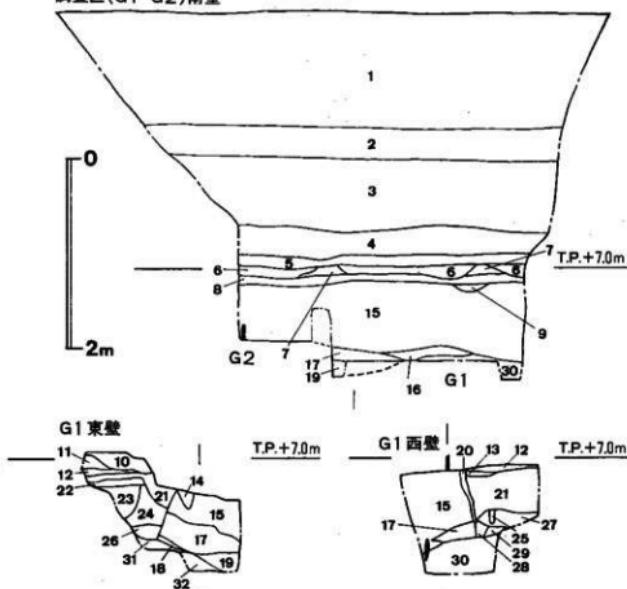
吹田市垂水町1丁目787-5を対象に実施した。調査地は垂水遺跡包蔵地の南西端T.P.7.0~8.0mの住宅地内に位置する。

今回の調査では、垂水遺跡における遺構・遺物の包蔵状況を確認するため、平成7年7月12日に工事予定地内に約5×7mの調査区を設定し、現代盛土層・旧表土層等については重機による機械掘削を行い、それ以下の層については、人力による分層発掘を行った。その結果、平安



第3図 トレンチ配置図

調査区(G1・G2)南壁



〔土層序〕

1. 淡黄褐色土層(現代盛土層)
2. 喧灰色土層(旧表土層)
3. 黄色土層(現代盛土層)
4. 淡灰色砂質土層
5. 灰色砂質土層
6. 淡橙灰色砂質土層
7. 淡青灰色砂質土層
8. 淡灰色粘質土層(青味がかる)
9. 青灰色粘土層
10. 淡灰色砂質土層
11. 淡青灰色砂質土層
12. 灰色粘土層
13. 淡青褐色粘土層
14. 喧灰色粘土層
15. 喧青灰色粘土層(落込み内埋土)
16. 淡綠黃色粘土層(硬質)
17. 淡灰褐色シルト層
18. 淡綠黃色シルト層
19. 淡綠黃色粘土層(硬質)
20. 青褐色粘土層(硬質、矢板若しくは杭跡か)
21. 喧灰褐色粘土層(硬質、砂まじり、土器を多く含む)
22. 淡灰褐色粘土層
23. 淡青褐色粘土層(ピット内埋土)
24. 灰白色粘土層
25. 淡青褐色粘土層
26. 黄灰色粘土層(ピット内埋土、硬質、土器を含む)
27. 黄灰色粘土層(硬質)
28. 淡青褐色粘土層(硬質)
29. 淡青褐色シルト層
30. 喧灰色粘土層(軟質、土器を含む)
31. 灰色シルト層
32. 灰色細砂層

第4図 土層断面図

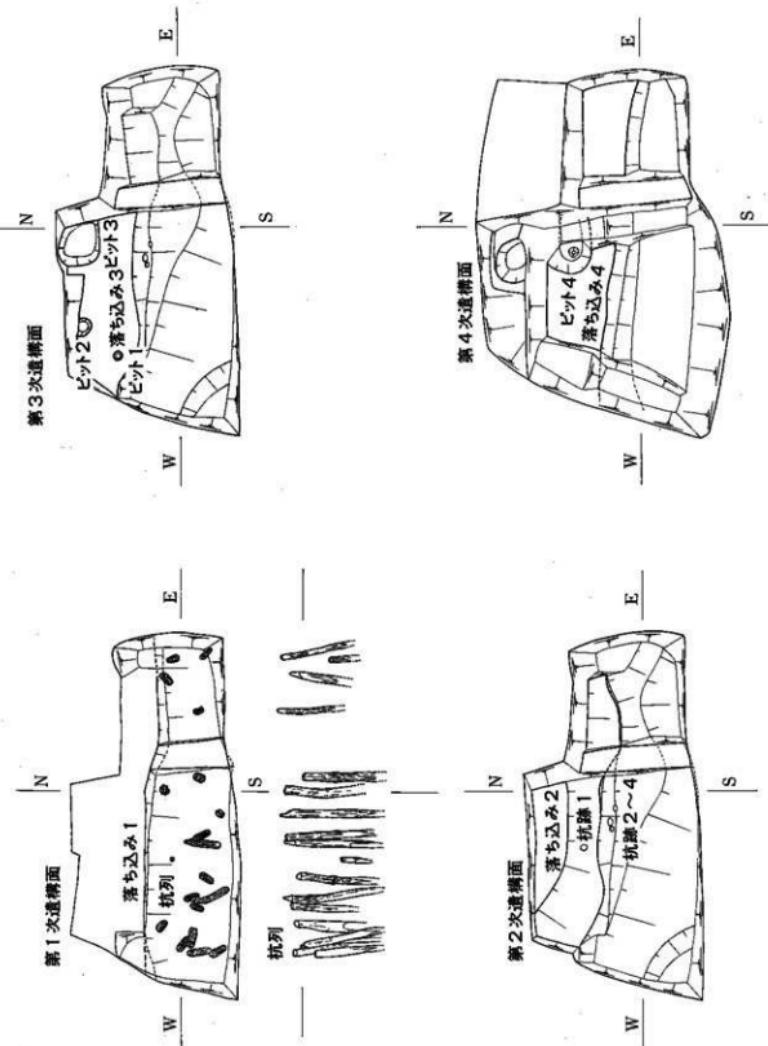
時代の造構面4
面を検出した。
そして、これら
の造構について
は慎重に調査を
進め、写真撮影、
平面図・土層断
面図等の記録作
成作業を行った
のち、調査区を
埋め戻し、7月
27日に調査を終
了した。

(2) 調査の成
果

- 1) 基本土層序
調査地内の土
層序は、厚さ最
大約230cmの現
代盛土層・旧表
土層等(第1～
3層)以下、淡
灰色の砂層・砂
質土層等(第4
～12層)が斜方
向に厚く堆積す
る。

その下層は山
側と谷側とでは
堆積状況が大き
く異なり、山側では極めて硬質の灰色粘土層(第21・22・24・27層)がほぼ水平方向に堆積す
る状況が確認され、これに対して谷側では軟質の喧灰色粘土が厚く堆積し、地山とみられる淡
青灰色粘土層にまで達する状況が確認された。これらの層のうち、第21・22・24・27層の各層
をベースとして、造構面の包蔵が確認された。

第5図 造構平面図



2) 造 構

第1次面 第21層をベースとして、落込み1か所（落込み1）と落込み内に土止めに使用されたとみられる杭列を検出した。

第2次面 第22層をベースとして、落込み1か所（落込み2）と直径約4.0～8.0cmを測る円形の杭跡4基（杭跡1～4）を検出した。

第3次面 第24層をベースとして、落込み1か所（落込み3）を検出した他、直径約8.0・16.0cmを測る円形のピット2基（ピット1・2）と一辺約34.0cmを測る隅円方形のピット1基（ピット3）を検出した。

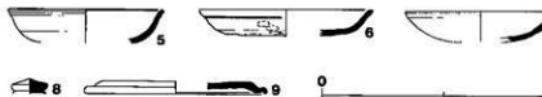
第4次面 第27

層をベースとして、落込み1か所（落込み4）を検出するとともに、ピット1基（ピット4）を検出した。

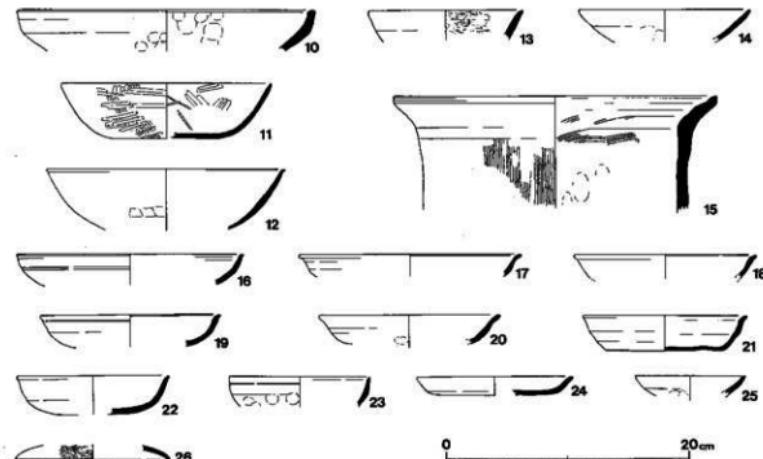


3) 出土遺物

調査区内の各層からは、弥生土器、



第6図 出土遺物実測図(1)



第7図 出土遺物実測図(2)

土師器皿・杯・碗・甕等、須恵器杯・蓋・甕等、黒色土器A類・B類、瓦、鐵製品、丸木杭など、主に奈良～平安時代の土器が出土した。今回出土した土器の多くが細片であるため、図化できた資料は26点であった。(1)・(2)は第30層、(3)・(4)は第22層、(5)～(8)は第21層、(9)は第21層上面、(10)～(26)は第15層からの出土である。

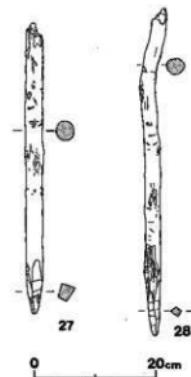
(1)は土師器皿で、口径13.4cm・器高2.6cm、体部内外面はヨコナデ、口縁端部内面には沈線を巡らす。(2)は土師器甕で口径26.0cm、口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面・体部外面はハケ目、体部内面はタテ方向のナデで調整する。(3)は土師器皿で口径17.2cm、体部内面はヘラミガキ、口縁部外面はヨコナデで調整し、口縁端部内面には沈線を巡らす。(4)は須恵器杯底部で、底部径12.0cmを測る。(5)～(7)は土師器皿で、口径12.4～14.2cm・器高2.2～2.8cm、体部内面はヨコナデ、体部外面はヨコナデ・ユビオサエで調整する。(8)は土師器蓋つまみで、径3.0cm・高さ0.95cm、ヨコナデで調整する。(9)は須恵器杯蓋である。口径15.0cm・器高0.95cmを測る。(第6図)

(10)は弥生土器で口径24.0cm、口縁部外面はヨコナデ・ユビオサエ、内面はユビオサエで調整する。(11)～(14)は黒色土器A類で、口径12.6～19.6cmを測る。(11)は器高4.5cmで、体部内外面にはヘラミガキを密に施す。(13)口縁部外面はヨコナデ、体部内面はヘラミガキを密に施し、(12)・(14)体部外面はヘラケズリを施す。(15)は土師器甕で、口径26.3cm、口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面・体部外面はハケ目、体部内面はユビオサエで調整する。(16)～(25)は土師器皿で、口径11.4～18.4cm・器高1.5～3.15cm、体部内面はヨコナデ、体部外面はヨコナデ・ユビオサエで調整し、(17)～(19)は口縁端部内面には沈線を巡らす。(26)は土師器蓋で口径12.1cm、外面はヘラミガキ、内面はヨコナデが施される。(第7図)

(27)～(28)は丸木杭で、(27)は長さ93.7cm・直径5.7～6.3cm、(28)は長さ105.6cm・直径5.2～5.8cmを測る。(第8図)

(3)まとめ

今回の調査地点は、千里丘陵南端の、繩文海進によって形成された海蝕崖の斜面上に位置している。そのため、現在も急な傾斜地で、これを切り盛りすることによって住宅地としている。遺構面については現在よりも約2.9mの比高差を有することから、さらに急峻な地形であったことが想像される。今回は4面の遺構面を検出したが、いずれも傾斜地上に盛土を行い平坦地化して生活面としていた様子が窺える。今回の調査では、土止め周辺の調査に止まったが、ピットなどの存在から調査区の北側には住居城が広がっていた可能性が考えられる。出土遺物からみて、平安時代前期の所産であり、その後は斜方向に堆積する軟弱な土層のみの堆積である。



第8図 出土丸木杭実測図

ことから、この地域は住居域として短期間に利用され、その後は放棄されて今まで丘陵斜面として忘れ去られていたものと考えられる。短期間に4回にわたる造構面の推移がみられるのは、環境の厳しさを物語るものかもしれない。

2. 吹田市円山町1727-7における試掘調査（第2期）

（1）調査の経過

今回の調査は、円山町1727-7において住宅建築工事に伴い、造構・造物等の包蔵状況を確認することを目的として、事前に試掘調査を実施したものである。

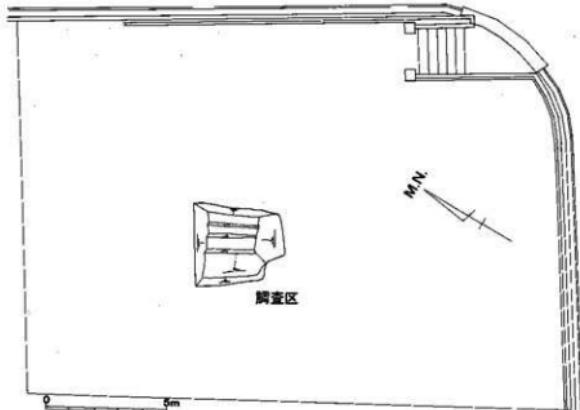
調査については、平成7年11月17日に試掘トレント1か所（約11m²）を設定し、重機を使用して実施した。

（2）調査の成果

調査地内のトレントの土層序は、基本的に、Ⅰ層 盛土（現代）、Ⅱ層 黒灰色土（現代旧表土）、Ⅲ層 暗灰色砂質土、灰褐色砂質土、淡灰色砂、白色砂、白灰色砂、黄白色砂、灰褐色砂礫、Ⅳ層 黄白色細砂（硬質、地山）である。

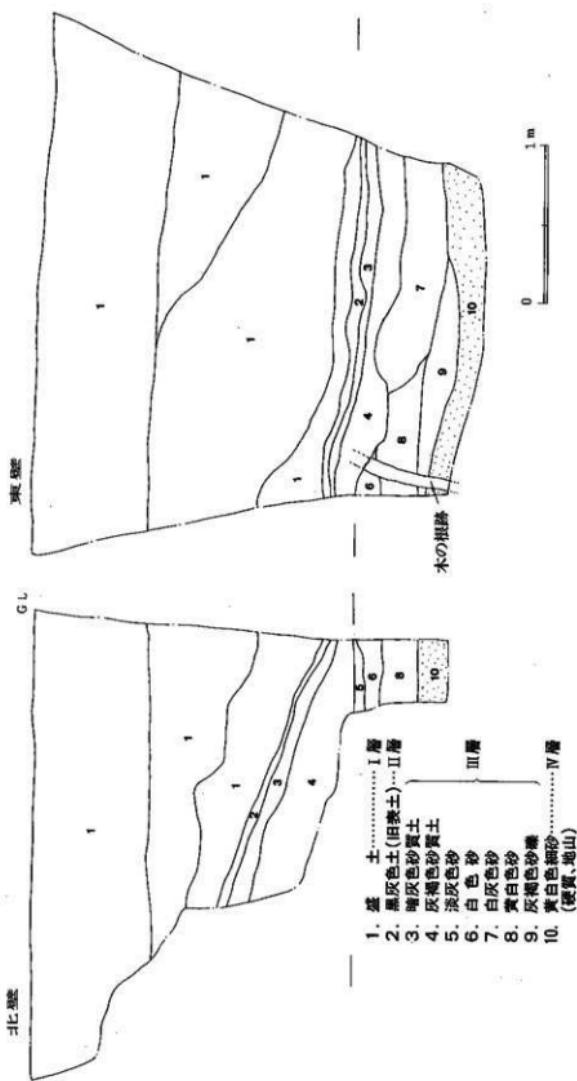
Ⅱ層は宅地造成される前の旧表土と思われ、東方向に約20°の傾斜をもって下がっている。その下のⅢ層は砂層を主体としているが、軟質であり、地山ではなく、再堆積した層と考えられる。Ⅳ層は細砂で硬質であり、地山と判断できる。これらの土層からは、造構・造物を検出しなかった。

以上のとおり、今回の調査では埋蔵文化財を検出せず、既に宅地造成により削平されたものと判断される。



第9図 調査区配置図

第10図 上層断面図



第3章 蔵人遺跡の発掘調査

1. 吹田市江坂町2丁目960-1における試掘調査（第1期）

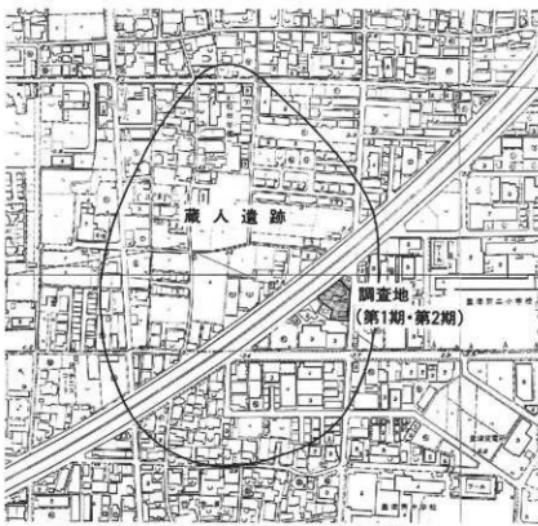
（1）調査の経過

今回の試掘調査は、共同住宅建築工事に伴う事前確認調査である。吹田市江坂町2丁目960-1を対象として、平成7年6月26日に実施した。調査は、当該工事予定地内に約 2×2 mの試掘トレンチ3か所（T1～3）を設定し、重機及び人力により注意深く掘削した。掘削終了後、トレーニング内の検出状況については詳細に観察し、写真撮影、土層断面図・平板測量図の作成等の記録作業を行ったのち、埋め戻して旧状に復した。

（2）調査の成果

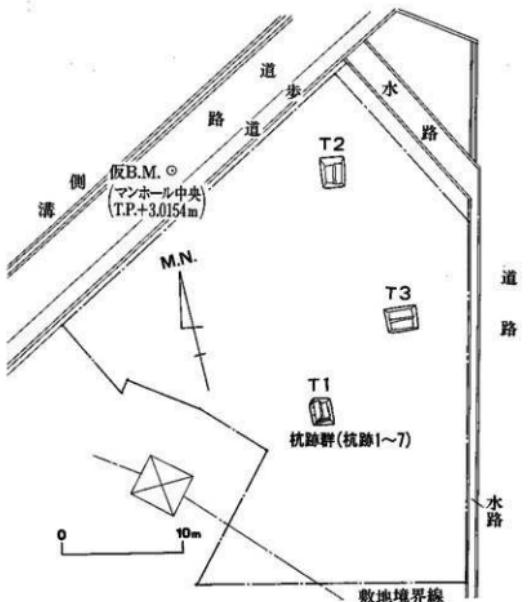
調査地内の土層序は、厚さ約60cmの現代盛土層（第1層）及び厚さ約15cmの旧耕土層（第2層・暗灰色粘質土層）以下、淡灰色の砂層（第3・5・6・9層）と粘土層（第4・7・8・12層）などの層が水平方向に堆積し、T1では灰色粘土層（第20層）の直下より地山である青灰色シルト層（第25層）が検出された。これに対して、T2では約70.0cm、T3では約55.0～60.0cm、T1よりも地山層（第25層）上面が低くなっている、その間には黒褐色粘土層などの植物葉・木片を多く含む軟質の粘土層（第16～18・22～24層）が厚く堆積する状況がみられた。これらの層のうち、T1では第20層をベースとして、直径約36.0cmを測る、ピット1基（ピット1）が検出された他、第25層をベースとして、直径約6.0～9.0cmを測る、杭跡7基（杭跡1～7）が検出された。

出土遺物としては、主に第20層より布留式土器甕・壺等の古墳時代の土



第11図 蔵人遺跡調査地周辺図(1:5000)

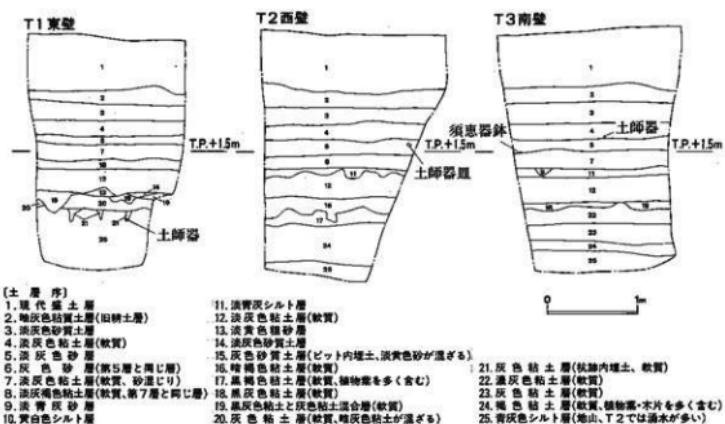
器が多数出土した。



第12図 調査区配置図

(3)まとめ

これまで、藏人遺跡での発掘調査、主に当調査地の北側で行われた第4次調査では、古墳時代の遺物を多量に含む、黒褐色粘土を主体とする軟質の層が検出されていた。そのため、付近に古墳時代の集落遺跡の包蔵が推測されていたが、上記の調査では集落そのものを発見するには至らなかった。今回の調査でも、集落と



第13図 土層断面図

断定できるような遺構は見当たらなかったが、T1とT2・3との土層の堆積状況の大きな変化を見ることができた。これは各調査区間での環境の違いを物語るものであろう。上記のことから、T1・3間には落ち込みがあり、これを境として、南側に古墳時代の生活域、北側に低湿地が広がっていた可能性が考えられる。

2. 吹田市江坂町2丁目960-1における発掘調査 (第2期)

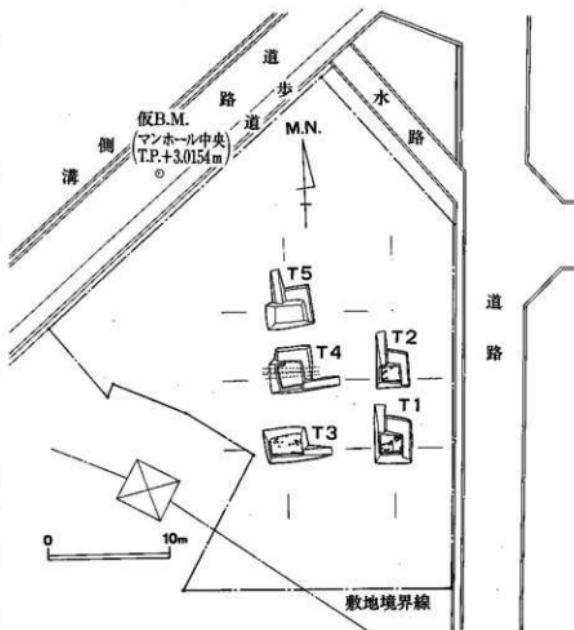
(1) 調査の経過

今回の発掘調査は、共同住宅建築工事に伴う事前調査である。吹田市江坂町2丁目960-1を対象に実施した。調査地は藏人遺跡包蔵地の南西端T.P.2.5~3.5mの住宅地内に位置する。今回の調査では、藏人遺跡における遺構・遺物の包蔵状況を確認するため、平成7年7月31日に工事予定地内に約2×2mの調査区を5か所

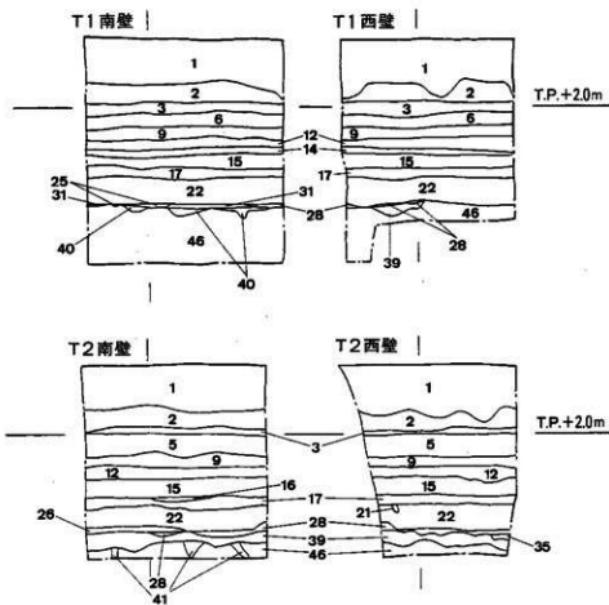
(T1~T5)設定し、
現代盛土層・旧表土層等について重機による機械掘削を行い、それ以下層については、人力による分層発掘を行った。その結果、古墳時代の遺構面をT3では2面、T1・2・4では各1面を検出した他、中世の水田畦畔2条を検出した。そして、これらの遺構については慎重に調査を進め、写真撮影、平面図・土層断面図等の記録作成業を行ったのち、調査区を埋め戻し、8月9日に調査を終了した。



第14図 遺構平面図



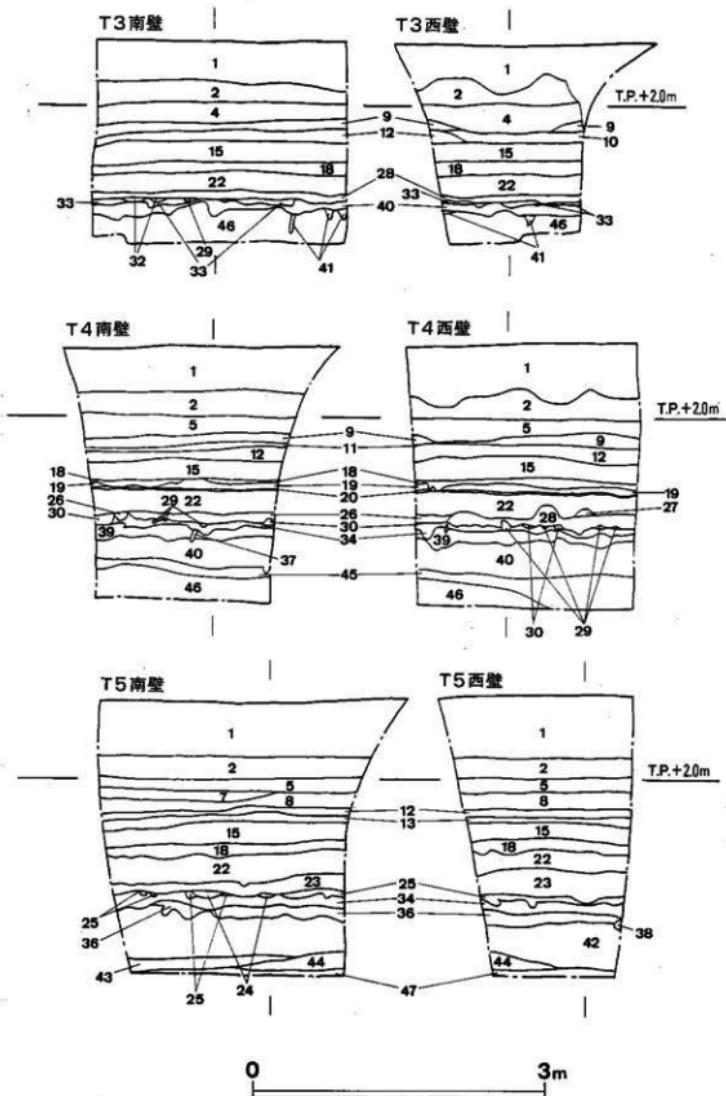
第15図 調査区配置図



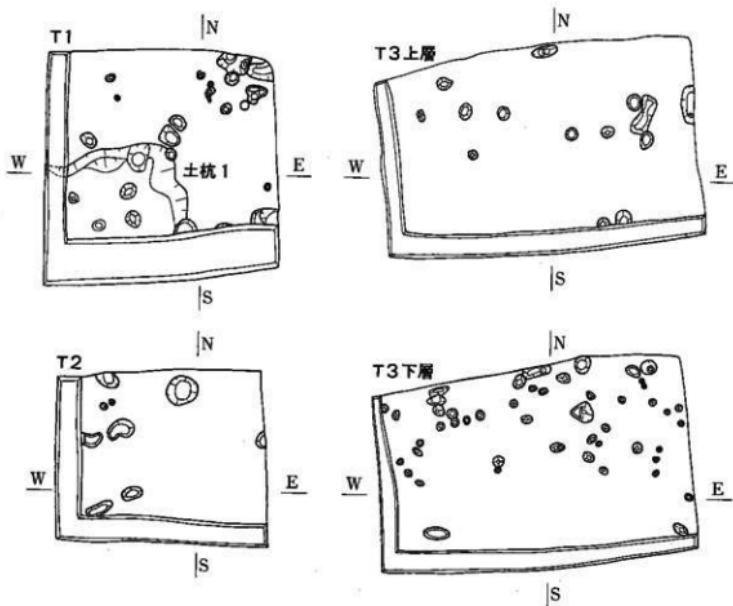
[土層序]

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1. 現代盛土層 | 25. 灰白色砂層(湧水層) |
| 2. 暗灰色粘質土層(旧耕土層) | 26. 淡灰褐色粘土層 |
| 3. 灰色砂質土層 | 27. 灰褐色粘土層 |
| 4. 灰色砂層 | 28. 灰褐色粘土層(沙混り) |
| 5. 淡灰色砂層 | 29. 淡黄色粗砂層 |
| 6. 淡青灰色砂質土層 | 30. 淡黄色粗砂層 |
| 7. 淡灰色粘質土層(砂まじり) | 31. 暗灰色砂質土層 |
| 8. 灰色粘質土層 | 32. 暗灰色粘土層 |
| 9. 淡灰色粘土層(軟質) | 33. 暗灰色粘土層 |
| 10. 淡綠灰色砂層(同色粘土塊を含む) | 34. 黑褐色粘土層 |
| 11. 灰白色砂層 | 35. 黑灰色粘土層 |
| 12. 淡灰色砂層 | 36. 黑灰色粘土と灰色粘土との混合層 |
| 13. 淡灰色砂質土層 | 37. 暗灰色粘土層(抗跡) |
| 14. 灰色粘質土層(軟質) | 38. 灰白色砂層(湧水層) |
| 15. 淡灰色粘土層(軟質、砂まじり) | 39. 淡灰色粘土層(土器を含む) |
| 16. 淡青灰色細砂層 | 40. 灰色粘土層(軟質) |
| 17. 淡青灰色シルト層 | 41. 灰色粘土層(抗跡) |
| 18. 黄白色シルト層 | 42. 褐色粘土層 |
| 19. 淡灰色粘土層(22層より淡い) | 43. 灰色砂層 |
| 20. 黄白色シルト層 | 44. 褐色シルト層 |
| 21. 淡青灰色細砂層 | 45. 淡灰色シルト層(植物を多く含む) |
| 22. 淡灰色粘土層(軟質) | 46. 青灰色シルト層(地山) |
| 23. 暗褐色粘土層(軟質) | |
| 24. 暗灰褐色粘質土層 | 47. 青灰色細砂層(地山) |

第16図 T1・T2土層断面図



第17図 T3～T5 土層断面図



第18図 T1～T3造構平面図

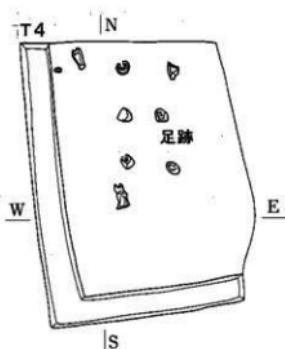
(2) 調査の成果

1) 基本土層序

調査地内の土層序は、厚さ約60~80cmの現代盛土層（第1層）・旧耕土層（第2層・暗灰色粘質土層）以下、灰色・淡灰色の砂層・砂質土層（第3~6・10~13層）や粘土層・粘質土層（第7~9・14・15・19・22・23層）がほぼ交互に堆積していた。さらにその下層には、T1~3では暗灰色粘土層などの層（第28・33層）が薄く堆積し、T4・5では黒灰色などの粘土層（第34・36・39~45層）などの層が厚く堆積し、それぞれ地山である青灰色シルト層（第46層）・青灰色細砂層（第47層）に達する状況が観察できた。

2) 造構

T1では、第46層をベースとして、約118.0cm以上×76.0cm以上を測る、土坑1基（土坑1）が検出され、約4.0cm~22.0cmを測る、ビット24基（ビット



第19図 T4足跡検出状況平面図

1~24) が検出された。

T 2 では、同じく第46層をベースとして、約4.0cm~26.0cmを測る、ピット9基(ピット25~33)が検出された。

T 3 では第33層をベースとして、約3.0cm~36.0cmを測る、ピット14基(ピット34~47)、第46層をベースとして、約4.0cm~22.0cmを測る、ピット49基(ピット48~96)が検出された。これに対して、T 4 では約40~95cm、T 5 では約90cm、T 1 よりも地山層(第46~47層)上面が低くなっている、その間には植物葉・木片が多く含む軟質の粘土層・シルト層(第39~40・42~45層)が厚く堆積していた。この辺りには、広範囲に低湿地が広がっていたものと考えられる。

この他、T 4 では第34層をベースとして牛と考えられる足跡が検出され、第28層をベースとして水田畦畔2条(畦畔1・2)が検出された。畦畔1は方位N-89.0°-E、幅約28.0cm、高さ約14.0cmを測り、畦畔2は方位N-89.5°-W、幅約22.0cm、高さ約8.0cmを測る。

3) 出土遺物

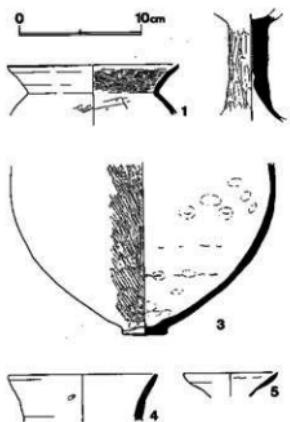
出土遺物は、弥生土器壺・高杯、庄内式土器甕、布留式土器甕・壺等の弥生~古墳時代の土器の出土が数多くみられた。これに対して、調査地南隣より中世の建物跡がみつかっているにもかかわらず、中世期の土器の出土量は極めて少ない。

また、出土遺物の多くが細片であり、図化できた資料はわずかに5点であった。このうち、(1)・(2)は46層、(3)は40層、(4)は39層、(5)は17層からの出土である。

(1)は庄内式の甕で、口径14.0cm(復元値)「く」の字形に屈曲外反し、口縁端部は上方へ摘み上げる。体部外面には叩き、内面はヘラケズリを施す。(2)は高杯で、円筒状の脚部外面にはヘラミガキを密に施す。(3)は弥生土器の壺で底部から体部下半までが残存する。底部径は3.7cmを測り、体部外面にはタテ方向のヘラミガキが密に施される。(4)は土師器壺口縁部で、口径12.0cm(復元値)、短く外反し、端部は丸く修める。内外面ともヨコナデを施す。(5)は土師器小皿で、口径7.6cm、体部内面と口縁部はヨコナデ、外面下半はユビオサエで調整する。

(3)まとめ

今回の調査では、遺構面を形成する第46層(地山)がT 1~3 と T 4~5 の間に、最大約95cmの比高差を持つことがわかった。この間に堆積した土層が褐色粘土層など(第39~



第20図 出土遺物実測図

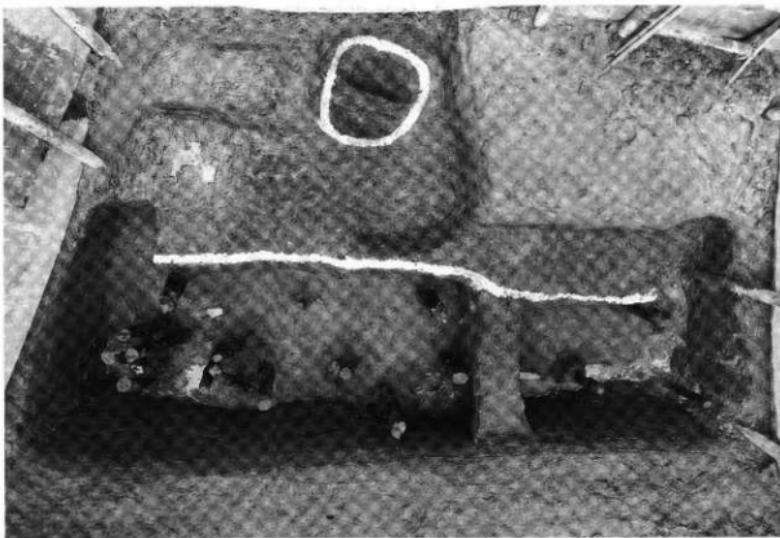
40・42～45層) の植物葉・木片を多く含む軟質の土壤であることから、T 4・5 は低湿地内で形成された土層と考えられる。今回の調査では検出できなかったが、T 2・3 の北側には、遺構面と低湿地とを隔てる落込みの存在が想定される。現在では、蔵人遺跡の分布する江坂町2丁目・豊津町一帯は、T.P.2.5～3.5mの住宅地内に位置し、それほど大きな起伏はみられないが、古墳時代の地形は、今回の調査にみられるように平坦な地盤ではなかったようである。蔵人遺跡東方のほぼ同時期に展開する垂水南遺跡では、小高い丘と谷が広がり、谷の部分が低湿地等を形成していたことが知られており、これと同様な景観が想像される。

次に、T 1～3 から約4.0～36.0cmのピット96基(ピット1～96)が検出された。その大多数が約15.0cm以下の小型のものだが、土層断面にみられるように、これらはいずれも杭跡と考えられる。上記のことから、これらの杭跡群は洪水などを防ぐために築いた護岸施設であり、それが後世になって削平された後の痕跡ではないかと推定される。さらに、これの南側には古墳時代の生活域が広がっていた可能性も考えられる。なお、出土遺物から見て、この低湿地は古墳時代前期には埋没し、その後はこの辺り一帯は平坦地化するとともに、水田化或いは湿地化したものと考えられる。

蔵人遺跡は弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。特に中世では古文書等の記録から、東寺領垂水荘内集落の蔵人村が知られており、これまでの調査でもそれを裏付ける建物跡等の遺構の包蔵が確認されている。当調査地ではそれらの遺構が検出されなかったこと、第28層上面から東西方向の水田畦畔が2条検出されていることなどから、中世以降は一貫して水田等の農地だったものと考えられる。



調査地近景(西から)

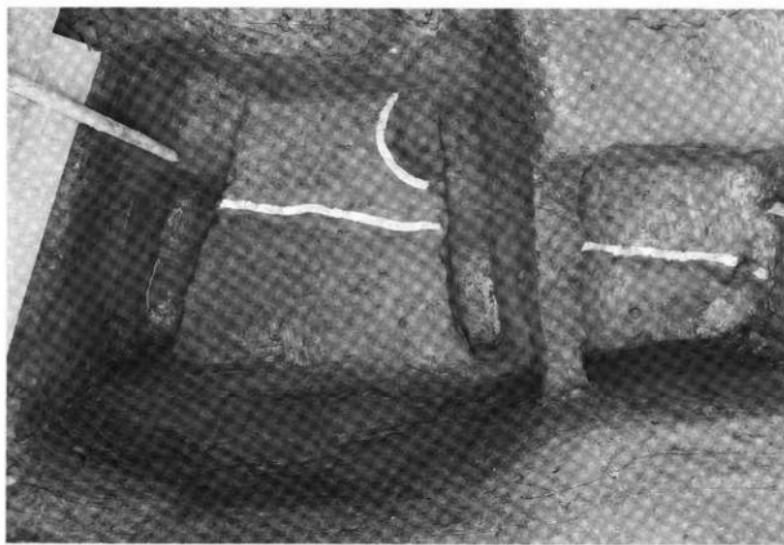


遺構面検出状況

図版二 垂水遺跡(第1期)



杭列検出状況(細部・東から)

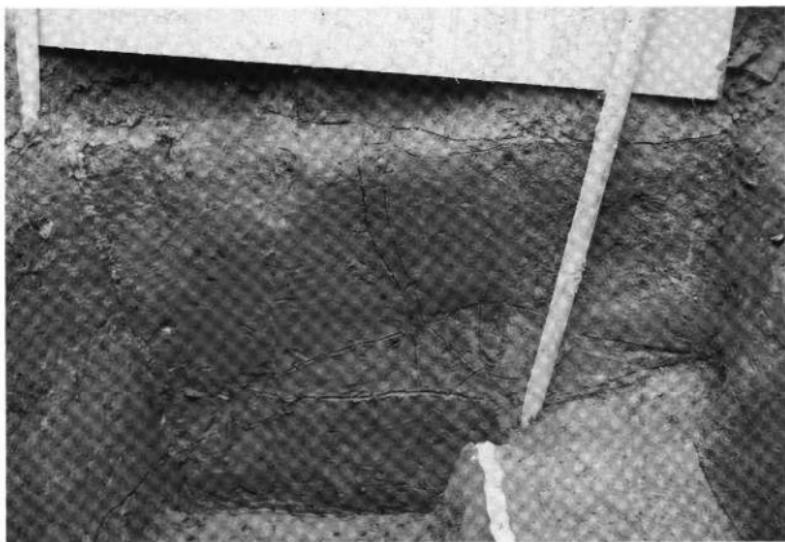


遺構面検出状況

圖版二 垂水遺跡(第一期)



南壁土層斷面

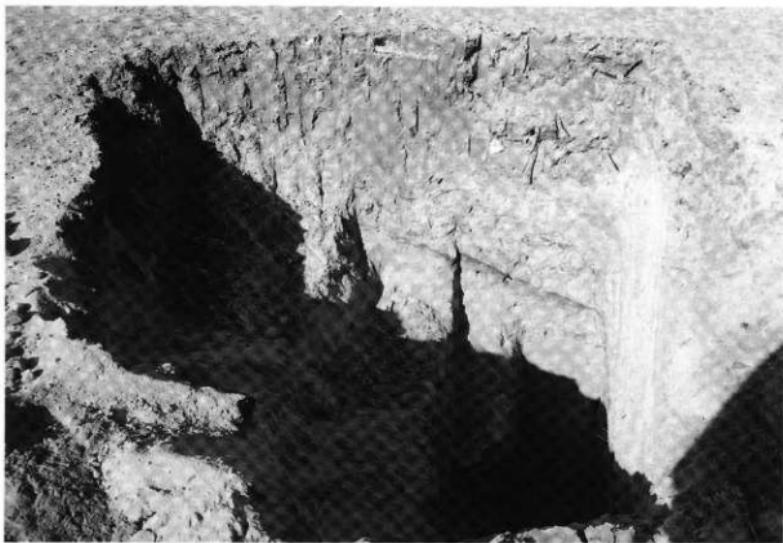


西壁土層斷面下部

図版四 垂水遺跡(第2期)



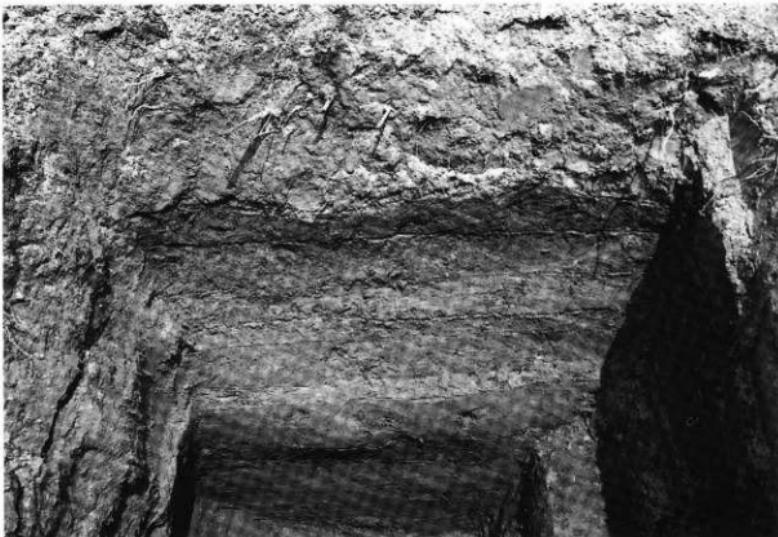
調査区近景(東から)



北壁断面(南から)



調査地近景(南から)

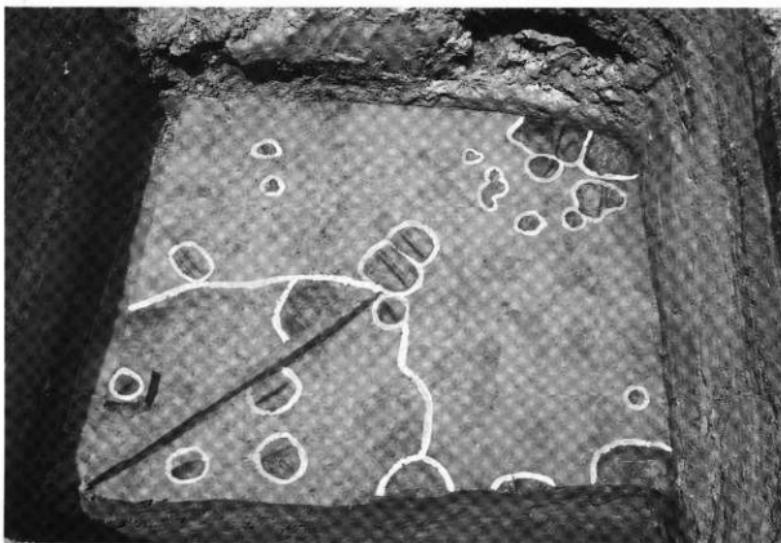


T1東壁土層断面

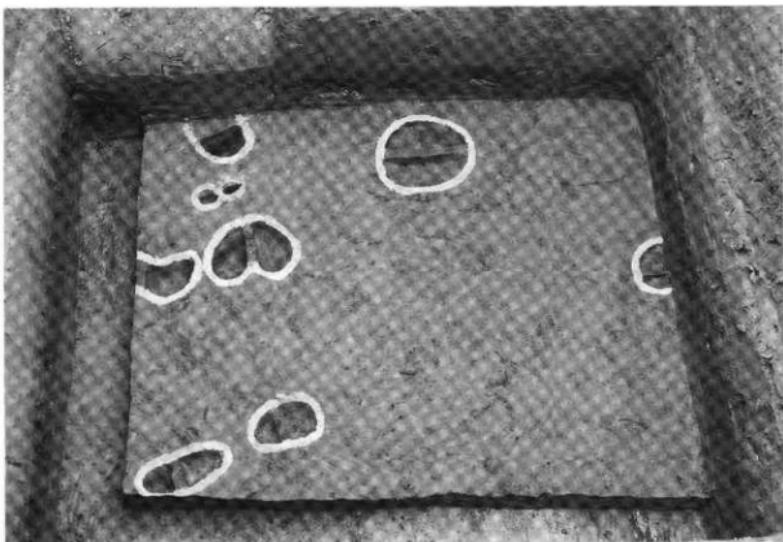
岡版六
藏人遺跡(第2期)



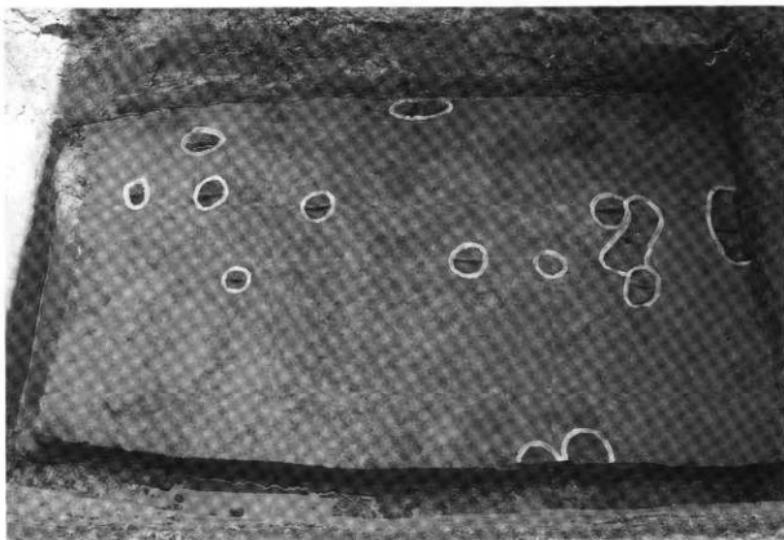
調査地近景(南から)



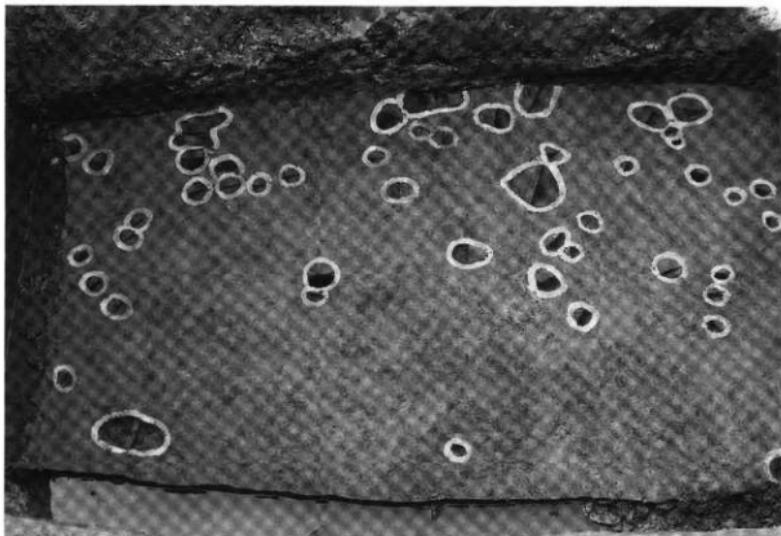
T1遺構検出状況(南から)



T2遺構検出状況(南から)



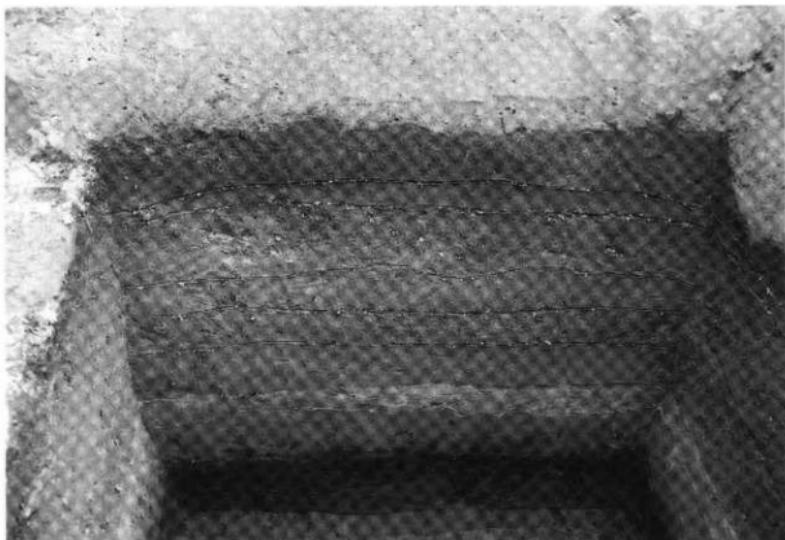
T3上層遺構検出状況(南から)



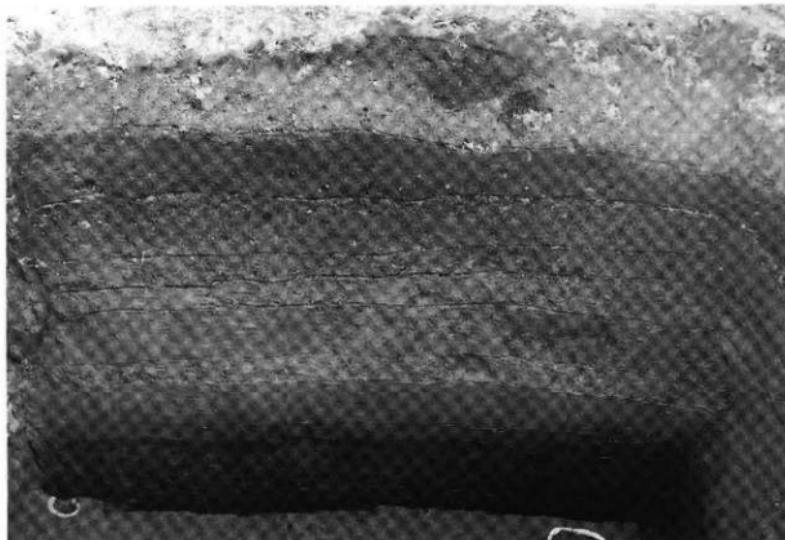
T3下層遺構検出状況(南から)



T4足跡検出状況(南から)



T2南壁土層断面



T3南壁土層断面

図版十 藏人遺跡(第2期)



T4西壁土層断面



遺物出土状況

[平成 7 年度]

埋蔵文化財緊急発掘調査概報

垂水遺跡
蔵人遺跡

平成 8 年 3 月 29 日

編集 吹田市泉町 1 丁目 3 番 40 号
発行 吹田市教育委員会